

# パネル発表「うさぎとのふれ合い体験指導実習」

桑原保光

## はじめに

学校での動物飼育は、命の大切さや思いやりの心などの情操教育に効果的であると以前から評価されています。また、子どもが継続的に動物を飼育することは、責任感や協調性、自尊心など、心の健全な発達に寄与しており、生活科、理科、飼育委員会活動等の学習内容に取り入れられています。

しかし、学校内で動物を継続的に飼育するには、様々な課題があげられます。適正な飼育方法、動物の健康状態の維持、衛生的な飼育舎の維持管理など、これまでは教職員や保護者による献身的な対応に委ねられていました。

群馬県は、平成10年より「小学校に獣医師を校医として」をスローガンに群馬県獣医師会と共に動物ふれあい推進事業をスタートさせ、国内でも先進県として小学校を中心とした学校動物飼育に関する支援や活動を行ってきました。

これまでに当事業を通して培ってきた経験やデータを元に、学校での正しい動物の飼育管理方法や授業への活用法の構築、また学校動物飼育による教育的効果の科学的な検証を行い、ここにまとめることができました。

この書籍が、今後の学校での継続的な動物飼育に活用され、さらなる学校動物飼育活動の飛躍の一助になれば幸いです。

## 1 目的

子どもたちに対して動物愛護思想の普及啓発を行うとともに、生きものである動物をとおして「やさしさ」「命の大切さ」を肌で感じてもらい情操教育の一助とすることを目的としています。

## 2 事業の経過と実績

平成10年度に小学校を対象とした「学校動物愛護指導」事業（現在の動物ふれあい推進事業）を県から業務委託され事業を開始しました。平成11年度からは幼稚園、保育園も対象とし事業を拡大しました。事

業実績は以下のとおりです。

また、18年度からは、県教育委員会から学校獣医師の指定が行われています。

平成10年度	小学校	75校	計75施設
平成11年度	小学校	99校、幼稚・保育園	92園 計191施設
平成12年度	小学校	138校、幼稚・保育園	112園 計250施設
平成13年度	小学校	172校、幼稚・保育園	141園 計313施設
平成14年度	小学校	198校、幼稚・保育園	148園 計346施設
平成15年度	小学校	223校、幼稚・保育園	157園 計380施設
平成16年度	小学校	241校、幼稚・保育園	158園 計399施設
平成17年度	小学校	247校、幼稚・保育園	168園 計415施設
平成18年度	小学校	254校、幼稚・保育園	169園 計423施設
平成19年度	小学校	258校、幼稚・保育園	168園 計426施設
平成20年度	小学校	265校、幼稚・保育園	164園 計429施設
平成21年度	小学校	268校、幼稚・保育園	148園 計416施設
平成22年度	小学校	259校、幼稚・保育園	149園 計408施設
平成23年度	小学校	264校、幼稚・保育園	148園 計412施設

## 3 実施内容

飼育動物に対する衛生管理指導（飼育環境改善、動物由来感染症対策を含む）、飼育動物の健康管理（予防指導、治療を含む）、動物ふれあい教室の開催、室内飼育の推進を実施しています。

また、教職員の初任者研修で動物ふれあい教室の講義及び実地研修を行っています。

（公益社団法人群馬県獣医師会／本会副会長）

# パネル発表「土日の対応 実例」

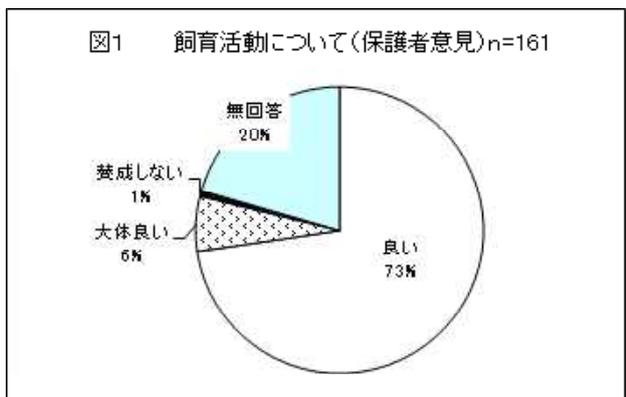
中川美穂子

多くの教育施設では、動物達の休日の世話に苦勞し、前日に餌を多目に与えて放置するケースが多く見られる、しかし、子ども達に命の教育の生きた教材である学校の動物達の世話を長期休業だけでなく、普段の土日にも愛情をかけて世話をすることは、子ども達に「命には休みが無い」と伝えるための重要なチャンスと言える。

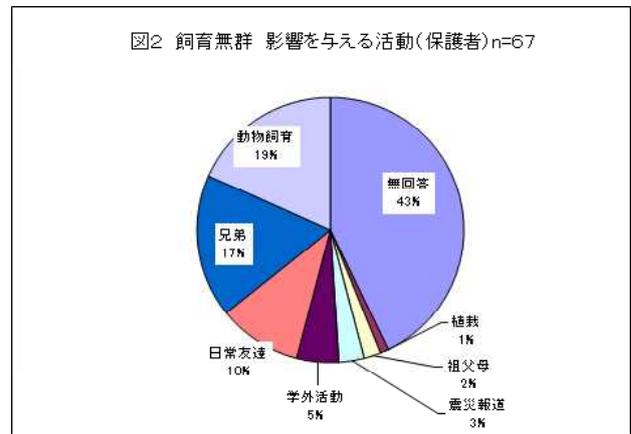
これに関し、朝日小学生新聞は繰り返し保護者が関わる休日の世話の実例として、①家庭に毎週末に持ち帰る②保護者と当番児童が世話にくるなどを報道していた。家庭に持ち帰るのはモルモットの事例が多く、保護者が学校で世話するのは、ウサギやチャボなど飼育舎での事例であった。またウサギ数羽の学校では、正月休みに家庭で預かっていたとの記事が見られた。

中川は、保護者対象の「公立小学校4年生総合的学習に位置づけた飼育活動について」調査したが、結果は以下のごとく、4年生が教科として学年全員で飼育する「学年飼育」の2校の保護者達（I群）は実践を肯定しており（図1）、休日の世話も子供とともに楽しんでいることが解った。

また他の2小学校における「飼育経験のない4年生」の保護者達（II群）は、4年生時期に生命観を育てた活動への回答は「家庭で動物を飼ったこと」が最多であった。（図2）。



つまり、家庭で動物との交流が無くなった現在、原体験がつけられる小学校中学年時期に、総合的学習に位置づけて、全員で持続する体験学習として動物飼育活動を行うことは、言葉では伝えられない生命観、



優しさ、労働の意味、将来の子育て、問題解決能力などに重要な意味があると、保護者は考えている。

また学校の教育目標に沿い教師の指導がある飼育活動は、土日の世話に参加が必要な保護者達も、「良い活動」だと評価して学校に感謝していた。（平成23年1月～4月（小平市・西東京市）調査）

## 1 対象

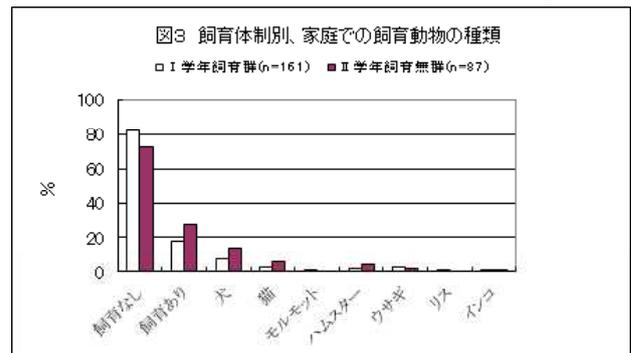
I群：学年飼育群の4学年保護者190名  
回収率85%

II群：学年飼育無群（飼育経験のない）4年生の保護者139名 回収率63%

## 2 結果

両群の保護者回答得点の分析から、①命の大切さを学ぶ②愛する心の育成を図る③人を思いやる心を養う④動物への興味を養う⑤ハプニングへの対応力（問題を解決しようとの態度）を養う⑥疑似育児体験が行われるなどの観点で、飼育活動に深い相関が確認された（SPSS、1%水準で有意）

なお、家庭での飼育率は犬猫モルモット、鳥などの愛玩動物を飼育していない家庭が



I群82%、II群72%であった(図3)。

### 3 資料 保護者自由記述から

(1) I群：学年飼育群の保護者の意見  
(@学校での学年の飼育活動への評価)

- ・「たいへんよい活動だと思います。ただ可愛いだけでなく生き物を育てる大変さや友達と協力する大切さが学べたと思います。」
- ・「動物を飼うということは、食事の支度やフンの始末など、面倒なことも当然やらなければなりません。学校の飼育活動を通じて、そのことを身をもって知ることができ、命の重さ、尊さを学ぶことができました。娘にとって大変有意義な一年でした。ありがとうございました。」
- ・「家で動物を飼う事ができない環境であったり、アレルギーなど体質的な問題などで、普通に生活している限り触れ合う事の無かった動物のお世話など、共に体験し、目の当たりにして、子供は動物が大好きなんだという事を知ることが出来ました。”生き物”の『生』と『死』についても、深く考える年頃になり、とても良い活動方針と思う。」

@土日の世話への意見(たまの土日に親子の交流)

この2校の親達は、土日に、子どもの当番につきそって一緒に活動するが、飼育の大変さより、意義を認めていた

- ・「良い活動だと思う。休みの日の当番のときは親子で出掛けて行くので親子の交流にもなるし、他の親子とも交流できて良かった。子供にも責任感や思いやりの心が育ってよいと思います。」
- ・「現在住んでいる所では動物が飼えないので、小学校で飼育活動をさせていただけるのは本当にありがたいです。週末の親子飼育では、毎回子どもたちが手際よく愛情を深めながらお世話できるようになっていくのが、楽しみでした。」
- ・「飼育活動は、普段なかなか動物と触れ合う機会がない子供達にはとても良い事だと思いました。土・日の親子ボランティアで、動物の世話をする子供達を見て、とてもほほえましく思えました。」

- ・「今まではかわいがるだけで、世話をすることがなかったので、ちゃんとできるか不安でしたが、『ひよこが食べやすいように』などえさの工夫もして当番をしていたので良かったです。当番の子どもたちがだれもサボることなく、それぞれの仕事をしている姿は、とても素晴らしかった。」
- ・子どもは休日も、草木の世話より真剣に取り組んでいた様です。

### (2) II群 学年飼育無群の保護者の意見

(子どもたちの成長を促した活動について)

- ・「今回の震災の放送などを見て、命の大切さを感じられているかと思います。食べられること、勉強できること、友達と会えることすべてに感謝をしながら生きていって欲しいものです。」
- ・「家でウサギを飼って、今までみだけの“可愛い”から、実際に飼ってみて、トイレの世話や食事など自分で体験し、その大変さと、見るだけではわからない動物のぬくもりや表情などから、それこそ見るだけではわからないキモチが芽ばえたように思う。」
- ・「学校の飼育小屋が校舎南側(裏側)にあり、ふだん勝手に校舎の裏に行ってしまうことになっているようで、残念でなりません。決してきれいとはいえない環境でニワトリとうさぎがいました。今はうさぎ1羽だけです。もっと動物と触れ合えるよう、学校の飼育小屋を工夫していただきたいと日頃から思っています。」(\*飼育舎整備後、平成24年度から学年飼育に変更)

国立大学法人東京学芸大学「総合的道德教育プロジェクト」

—心に響く体験学習プロジェクトの開発—

平成24年2月16日成果報告書より

よい結果を得られて、保護者の同感もえられるような飼育活動を獣医師の支援を得て実現することが、児童に生命観、自尊心、利他的態度を養うなどなど、未来の日本には重要なことと考えられる。

(全国学校飼育動物研究会事務局長/  
全国学校飼育動物獣医師連絡協議会主宰)